

“帰ってくるタンゴ”

峰 万里恵 (うた) 齋藤 徹 (コントラバス) 高場 将美 (ギター)

“Tangos que vuelven...”

Marie Mine (voz) – Tetsu Saitoh (contrabajo) – Masami Takaba (guitarra)

1. ラ・クンパルシータ *La cumparsita*

詞：パスクアル・コントゥールシ 曲：G・H・マトス・ロドリゲス 補作：エンリーケ・マローニ

長年にわたって、世界のどこかで24時間演奏されているとまでいわれた怪物的な「名曲」ですが、アマチュアの作品です。アルゼンチンの隣国ウルグアイの首都モンテビデオで、大学生グループのカーニバル行進曲としてつくられ、タイトルは「小さなパレード・グループ」という意味です。

できてから7年ほどたった1924年に、ブエノスアイレスの大衆演劇に挿入するために、原作者に無断で、第1部のメロディを補作し、全曲に歌詞が付けられたことで、いちやく有名になりました。20年代の末ごろにはヨーロッパでも大流行し、やがてはタンゴ楽団のほとんどすべての必須レパートリーになりました。



あなたにわかってもらえたら——まだわたしは魂のなかに、あの愛情をもちつづけていることを。

あなたはわかることができるのだろうか？——わたしが決してあなたを忘れなかったことを。あなたの過去をふりかえれば、きっと、わたしのことを思い出さず。

友だちはもう訪れてもこない。わたしをなぐさめてくれる人はだれもない。わたしの命の人よ、あなたはわたしの哀れな心に何をしたのだ？

見捨てられたまじい部屋には、もう朝の太陽も顔を窓からのぞかせない。わたしの仲間になってくれていたあの犬は、あなたが去ってからものを食わず、このあいだひとりぼっちのわたしを見て、やはりわたしから去っていった。

あなたにわかってもらえたら……。

2. スール (南) *Sur*

詞：オメーロ・マンシ 曲：アニーバル・トロイロ

ブエノスアイレス市の南のはずれに近いポンページャ地区は、詩人マンシが学生時代をすごしたところでした。街のはずれには小さな牧場もあり、大草原と都会のはざま——大雨が降ると川が氾濫しました。この曲は、まず歌詞が書かれ、バンドネオン奏者で楽団リーダーのトロイロが作曲しました。そのさい、曲が転換する部分（「スール……」とうたわれる部分）は、トロイロが自由に作って、それに合わせて歌詞を書き直したのだそうです。

1940年代に、すでに消えてゆこうとしていた風景をうたったこの曲は、時がたつほど評価が高まり、近年では、スール (南) ということばは、タンゴの原風景のシンボル、キーワードとして使われるようになりました。



古いあの街角と、いちめんの空。ポンページャ地区、あの土手に近づけば、恋人のきみの長い髪が思い出のなかに。そしてきみの名前は、さよならのことばの上に浮かんでいる。あの鍛冶屋があった街角、泥と草原、きみの家ときみの歩道とあの掘割り。雑草とアルファルファ (牧草) の薫りが、いまふたたび、わたしの心を満たす……。

古いあの街角——なくなってしまった空。ポンページャ地区、もっと先は水びたし。愛情でふるえていた、きみの20年、あのときわたしが盗んだキスの下で。過ぎていったことどものノスタルジー、人生がいっしょに運んで行ってしまった砂、変わってしまった街に染みついたくるしみ、そして死んだ夢ののがさ……。

南……土塀とその先は……南……酒場の明かりひとつ。もう決してきみには見えないだろう、ショーウィンドーにもたれかかって、きみを待っているわたしの姿が。もう決してわたしは星たちで照らすことはないだろう、ポンページャの夜また夜、仲むつまじいわたしたちの歩みを。場末の路たちと月たち、そしてわたしの愛ときみの窓——すべては死んでしまった。わたしには、よくわかっている。

3. 悲しいゴルド (でぶ)

El gordo triste

詞：オラーシオ・フェレール

曲：アストル・ピアソラ

ゴルド (でぶ、肥った人) は、1940年代のタンゴ黄金時代の大スターであるバンドネオン奏者アニーバル・トロイロ (愛称ピチューコ) の、非常に親しい人のあいだでの呼び名です。彼はブエノスアイレスのシンボルとして、生きた偶像のような存在でした。1975年、久しぶりに大編成のタンゴ・オーケストラをひきいて長期公演中のある夜、自宅に帰って亡くなりました。まだ60歳でした。

彼に捧げたこの曲の作曲者ピアソラは、新しいタンゴの創造者ですが、18歳の時にトロイロ楽団のバンドネオン奏者となったのが、本格的なタンゴ活動のスタートでした。

詩人オラーシオ・フェレールは幼いころトロイロ楽団のレコードを聴いたことでタンゴに魅せられ、タンゴ研究者・評論家・著作家そして作詞家として生きてきました。現在アルゼンチン国立タンゴ・アカデミーの会長です。



あなたは、ポマードで髪をなでつけた雀の詩人に見える。あなたの声は、隠れたシンバルの上の猫。ワインの謎があなたの両目を愛撫し、ひとつの痛みが、あなたのスーツのえりと、あなたの月と太陽を薫らせる。

大天使とやくざと腕を組んで、あなたはふたつの水溜りのような眼鏡をかけて去ってゆく。藤の花たちが涙で曇っているのは誰のせいだか見張りに行く。もの言わぬ橋たちのもちぬしピチューコ。

毎晩死んでいるおかげで、どんな死も決してあ

なたにはふさわしくない。あなたの星たちがゆらぐことは決してない。市場でのミサのもちぬしピチューコ。

この男はどんな悪党のシェークスピアから逃げ出してきたのだ？ 1本のマッチに、ふくれあがる嵐を見たこの男、曲がりくねった譜面台たちのあいだをまっすぐ歩くこの男、月のない犬たちのために祭りの楽隊広場をつかってあげるこの男。

立ったまま倒れる木たちがいるブエノスアイレスの夜明けを、こんなに上手に道案内できる人はいない。こんな人種を引き継ぐ者はいるのか？

場末の貴族であるがゆえに、彼は彼自身に向かってだけ、やせていた。「時」も肥っているけれど、人にはそう見えない。中庭のようにみんなを包む両手をもったピチューコ。

そしていま、水の流れがおだやかになったとき、鳥かごの中で子どもたちが歌っているとき、思い出してください、夢を見てください、生きてください、素適なゴルド (でぶ)、わたしたちに愛されて……わたしたちに……

彼の指に止まった鷲の親分が叫び、息子たちを夢の頂に呼び寄せる。高い空の上の涙で、風のように泣くために！ すべての民 (たみ) となって歌うために、ミロンガと涙で！

4. チキリン・デ・バチン

Chiquilín de Bachín

詞：オラーシオ・フェレール

曲：アストル・ピアソラ

ブエノスアイレスの中心街には、炭焼きグリルの専門店がいくつか競い合っています。油がはねるので、テーブルクロス代わりのザラ紙は1回ずつ使い捨て。日本の焼き鳥屋の感じに近い、気おけない食堂です。《バチン》はその中でもとくに人気の店で (いまは立派なレストランになったらしいですが)、有名無名のアーティストたちも深夜過ぎによく食べに来ました。今でいう「セレブ」も——この曲のできた1970年ごろには、そういう人種はいなかったかもしれませんが——常連客に混じって、さまざまな部位のステーキや手づくりソーセージにかぶりついています。

《チキリン (ちび)》は実在した花売り少年の名前です (本名はわかりません)。この曲によって存在が有名になりましたが、しあわせな人生に入れたかどうか？……

この曲はピアソラとフェレールが共同創作をはじめた時期のワルツで、そのころは作曲と作詞がほとんど同時進行でつくられていました。

なお、歌詞に出てくる1月6日は「主御公現の祝日」で、生まれたキリストをたずねて東方の3博士が贈り物をもってきた日です。この日の朝、子どもたちの靴には贈り物が入っている——クリスマス・プレゼントの起源の風習です。



夜ともなれば汚れ顔、ブルージーンの小天使、

バチンの食堂でテーブルをまわってバラを売る。月がグリルの上に輝くならば、彼は月を食べ、煤 (すす) のパンを食べる。

毎日が悲しみのなか、その悲しみは朝になろうとしない。とある1月6日の朝、夜明けは裏返しに星で彼を寝過ごさせた。そして3匹の猫博士たちが彼の靴を盗んでいった。両方とも左足の靴を。

太陽が子どもたちに学校の制服のエプロンをつけるとき、彼は学ぶ——どれほどのゼロを、これから覚えなければいけないか。

明け方にはいつもゴミ箱で、パンひとつとスパゲッティ1本で、彼は凧 (たこ) をひとつつくる。飛んでいくつもり、でもまだここにいる！

彼は不思議な人間、千年を経た子ども。彼のかでは紐がこんがらかったまま。

チキリン！ おまえの声をひと東おくれ。そしてわたしは売りに出る。わたしの恥ずかしさを花にして。

わたしを3輪のバラの弾丸で撃っておくれ。おまえの空腹が理解できなかったわたしの、心の重荷がほんとに痛むように。

5. コントラバヘアンド *Contrabajando*

曲：アストル・ピアソラ & アニーバル・トロイロ

コントラバスは、タンゴのアンサンブルに重要な役割を果たす楽器ですが、スターではありませんでした。彼を愛するピアソラが、彼を主役にして作曲したのがこのタンゴです。タイトルは「コントラバスしながら」という意味(?)にとれる造語です(1954年発表)。

初演したトロイロ楽団(コントラバス奏者キチョ・ディ

アス)のスタイルに合わせて、より伝統的なリズムの部分が入っていますが、トロイロごのみにピアソラが書いたのだと思います(著作権はふたりの共同名義で登録)。

ちなみに、徹さんのコントラバス本体と弓は、ちょうどタンゴがこの世に登場したころの楽器です(1877年、Gand & Bernardel 製作)。

6. 亜麻の花 *Flor de lino*

詞：オメーロ・エスポーシト

曲：エクトル・スタンポーニ

このワルツがはじまると、「夜」はひとつの花で、その花びらをむしって恋占いをしているひとの姿が浮かんできます。こんな超現実主義の詩を、ポピュラー音楽の歌詞として書いたエスポーシトは、1940年代のタンゴ界に新鮮な風を吹き込んだ、革命的な作詞家でした。彼は「作詞家はみんな詩人の才能をもっている。でも、いい詩人でも、歌詞づくりの才能がない人がある」と言っています。

スタンポーニはピアニストで、やはり1940年代を代表する作曲家。エスポーシトと同様に、ブエノスアイレス州の地方の町から首都に出て活動し、若くみずみずしい感受性でタンゴの魅力をひろげました。

＊

夜の花びらをむしっていた、キスをひとつもらうのを、むなしく待ちながら。でもわたしは夢見ていた、熱く抱きしめる春の大地の大きなキスを。——亜麻の花、なんとという不思議な運命が、花ひらく亜麻の道を断ち切ってしまったのか!

夜の花びらをむしっていた、わたしがいま彼女を待っているように待ちながら、新しい服を着せられ

た男の子たちみたいに恥ずかしさでいっぱい。

不在の花、あなたの思い出はいつもわたしを追いかけてくる、いつも夜の、わたしの孤独のなかを。

夜の花びらをむしっていた、わたしがいまあなたを待っているように待ちながら、町に着いたびんぼろな牛飼いのように恥ずかしさでいっぱい。

どれほどのものが去っていったことか! そしてきょう——いつまかならず——帰ってくる、いつも夜の、わたしの孤独のなかを。

わたしは彼女が花ひらくのを見た、太陽で熟したアルゼンチンの野の亜麻のように。もしわたしが彼女のことを理解できていたなら、いまわたしの小屋には愛があるのに! でもある日、悪魔のしわざ! わだちの跡が彼女を連れ去った。きょう野は花ざかり……呪われたわたしには、彼女の愛がない!

7. ボルベール(帰郷) *Volver*

詞：アルフレード・レペーラ

曲：カルロス・ガルデル

作曲者カルロス・ガルデル(1935年に飛行機事故で没)は、タンゴの歌いかたを「発明」した、タンゴ歌手として永遠の最高峰です。この曲は彼が主演したパラマウント映画(1934年)『想いのとどく日』の挿入歌のひとつとしてつくられました。作詞者レペーラは脚本家です。

ガルデルの作曲法は、多くの場合、ドラマの感情にふさわしいメロディを彼がうたって作ります。専属のピアニストが、そのメロディに適切な和音をつけて楽譜に定着します。そこに歌詞が付けられて完成というわけです。うたってつくったメロディは、1音も変えません。

＊

わたしには見える気がする、遠くでわたしの帰り道を教えてくれている光のまたたきが。そのおなじ光がかつては、深い痛みの時間を青白く照らしていたのだ。

人はそう望まないのに、最初の愛に帰ってゆくもの。あの古い通りで、いつか、こだまが言った、

「あのひとの命はおまえのもの、あのひとの愛はおまえのもの」 そのとき、あざけるように見下ろしていた星たちが、今日は冷ややかに、帰ってゆくわたしを見ている。

わたしはこわい、わたしの人生と対決しようとして帰ってくる過去と出会うのが。わたしはこわい、数々の思い出の鎖でわたしの夢を縛りつける夜が。でも逃げてゆく旅人は、遅かれ早かれ、歩みを止める。そしてすべてを破壊する忘却が、わたしの夢を殺してしまったとしても、わたしはとても小さな希望を隠し持っている。——それが、わたしの心の全財産。

帰ってゆく……「時」の雪で銀色に染まったこめかみ。感じる……人生は風のひと吹きだと、20年は「無」にすぎないと。生きてゆく……魂は甘い思い出にしがみついたまま。その思い出に、ふたたびわたしは泣く。

8. 想いのとどく日 *El día que me quieras*

詞：アルフレード・レペーラ 曲：カルロス・ガルデル

おなじ映画の挿入歌です。この映画ではカルロス・ガルデルは、20代の若者時代から、娘のいる父親（妻は病死）という老け役まで演じて、円熟したアーティストぶりを発揮します。国民的英雄であり、ほとんど神様である彼の生い立ちについて語るのタブーになっていますが、推定では、この映画の出演時（事故死の前年）53歳でした。

ガルデルは自作によくタンゴ・カンシオン（タンゴ歌曲）という形式名をつけましたが、この曲は単にカンシオン（歌）としています。タンゴの枠を超えて、世界のポピュラー音楽として愛されるメロディをつくりたかったのです。

★

わたしの夢をやさしく撫でるあなたのためいき。
あなたの軽い笑い声は、歌のように、わたしの傷をいやしてくれる。そして、すべては忘れられる。

あなたがわたしを愛する日、華やかなバラたちは、いちばん素適な色の晴れ着で飾る。風に向か

って鐘たちが、あなたがもうわたしのものだと告げ、あなたの愛のことを語り合う。

あなたがわたしを愛する日、この世には調和が満ち、朝の光は澄みきって、泉は楽しげに湧き出し、水晶の歌をうたう。そよ風はメロディのさざめきを運んでくる。

歌い手の小鳥の声はさらに甘くなり、人生に花が咲き、痛みは存在しなくなる。

あなたがわたしを愛する夜、空の青い深みから嫉妬ぶかい星たちが、通り過ぎるわたしたちを見ているだろう。そして神秘の光線が、あなたの髪にやどる。

まるで、なんでも見たがるホタル——その光は見とどける、あなたが、わたしのなぐさめだと。

お聴きいただき ありがとうございます。

またお会いできるのを 楽しみにしております。

“帰ってくるタンゴ”

映画『12タンゴ』上映 + タンゴ・ライブ

2007年4月21日

アップリンク・ファクトリー

出演：

峰 万里恵（うた）

齋藤 徹（コントラバス）

高場 将美（ギター）

企画：倉持 政晴（アップリンク）／峰 万里恵

プログラム作成：高場 将美

☞ ホームページ / ブログ ☞

峰 万里恵 <http://mariemine.web.fc2.com>

齋藤 徹 <http://www.tetsu-saitoh.com> <http://blog.tetsu-saitoh.com>

アップリンク <http://www.uplink.co.jp>

